

きました。自分でお金を稼ぐようになってから、酒を飲んで朝帰りをしたり、友達の家に泊まって家に帰ってこなかったりすることが増えました。しまいには、勝手に部屋を借りてそこに住むと言って家を出て行ってしまいました。

当時、私は息子の様子が心配になり、空いた時間に息子に電話をしたり、夫に叱ってほしいと言ってみたりしていたのですが、自分自身の仕事が忙しく、しっかりと息子と向き合って、話をすることができませんでした。

そんなある日、息子が家に帰ってきて「もう自分の部屋には戻らない。実家に住む。」と言いました。その時の息子は、なんだか落ち込んでいるような、何かに怯えているような様子でした。このような息子を見るのは初めてでしたので、何があったのか聞いたのですが、息子は詳しい話をしてくれませんでした。

数日後、警察官が家に来て、息子は逮捕されました。

その時、私は、息子が暴力団の組員になっていたこ

と、薬物の密売にまで関わっていたこと、そして、息子自身も大麻を乱用していたことを初めて知りました。私は息子に、「薬物は絶対に手を出してはダメ。1度手を出したら人生終わりだよ。」と言い聞かせていただけない、大きなショックを受けました。

あとから息子に聞いた話ですが、暴力団から借金を背負われ、組員として薬物の密売をさせられていたこと、息子が借りていた部屋は、大麻や覚醒剤を隠すための倉庫として使われ、警察に見つかれば、息子だけが捕まるような状況を作り上げられていたそうです。

息子が家に戻ってきたあの日、息子は私に助けを求めているのだと思います。

今となっては、とんでもないことに巻き込まれ、怖くなって逃げ出してきた息子の気持ちになぜ気付かなかったのだろう、それよりもっと前に、息子の変化に気付いてあげられれば、こんな結果にはならなかったのではないかと、母親として責任を感じ、悔やんでいます。

元覚醒剤乱用者

40歳代、男性

やめようとしても、やめられない。 一生続く、苦しい闘い。

一体、自分はどうやって道を踏み外したのだろう。でも、未成年だった私が自分でクスリを使う選択をしたこと、その後もクスリを使い続けてきた事実は揺るぎません。

私が使ってきたクスリは覚醒剤です。これまで警察に2回逮捕され、懲役経験もあります。

私は20歳そこそこで覚醒剤にはまり、明確にやめたと断言できないまま時間は流れ、既に40代に突入しました。10代の頃、周りの不良仲間とタバコを吸ったり、バイクで走ったり、いろんな悪さを繰り返していました。そのような人間関係の中で、先輩が覚醒剤を使っているという話が耳に入ってきました。

ある日、私はその先輩から覚醒剤をやらないかと誘われました。「注射でやるのは、なんか怖いな。」という気持ちもあったし、「今更やらないとか、ダサくて言えないな。」という気持ちもありました。でもクスリをやるのが、どこかかっこいいという気持ちが上回り、覚醒剤を使うことにしました。

覚醒剤を使うことが常態化してくると、自分の周りの人間関係はどんどん変化しました。それまで直接交わることのなかった薬物の売人や暴力団とのつながりが増えました。覚醒剤の取引でトラブルとなり、相手から金銭を脅し取られたことは、一度や二度ではありません。

覚醒剤を使う頻度や量も、どんどん増えていきました。最初の頃は先輩と一緒に覚醒剤を買っていましたが、そのうち一人でも買いに行くようになりました。

当時、私には交際していた女性がいました。仕事もしていました。将来のことを真剣に考え、ようやくですが覚醒剤をやめたいという前向きな気持ちも湧き上がりました。しかし、少しの間なら覚醒剤を使わずにいられるのですが、完全にやめることはできませんでした。自分では覚醒剤をやめたいはずなのに、気付いた時には、「1回ぐらいなら大丈夫。」「今回だけ。」そんなことばかり繰り返していました。覚醒剤をやめられない自分に嫌気が差し、無力に感じ、そのうち死にたいと思い始めました。自分がやっていることに対する罪悪感に押しつぶされそうになりました。彼女のことを裏切っていると思い、涙があふれて止まらなくなりました。

それでも売人が用意した覚醒剤を目の前にすると、早く体に入れたくてどうしてもなくなりました。さっきまで目の前に浮かんでいた彼女のことが一瞬で消え去ってしまうのでした。

ある朝、警察が私の家に行ってきました。目の前が真っ暗になりました。私は逮捕されました。逮捕されたことで、彼女は私から離れていきました。

今、私は刑務所での刑期を終え出所しましたが、覚醒剤をやめられたと言い切れる日は今後も一生来ないと思います。

覚醒剤はそれほど恐ろしい薬物です。





大麻事犯検挙人員は、平成26年以降増加が続き、令和4年も、過去最多を記録した前年に続く高い水準となりました。特に、**20歳代が過半数を占める**など、**若年層**を中心とした大麻の乱用拡大が問題となっています。

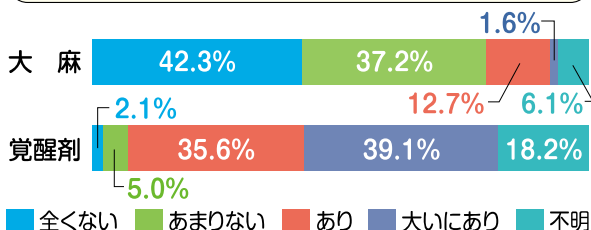
① 大麻乱用者の実態

令和4年の一定時期に大麻取締法で検挙された者のうち、違反態様が単純所持の者について、捜査の過程において明らかとなった大麻に対する認識等は次のとおりです。

●危険（有害）性の認識の比較

大麻に対する危険（有害）性の認識は、「**なし（全くない・あまりない）**」が**79.5%**で、覚醒剤に対する危険（有害）性の認識と比較すると著しく低くなりました。

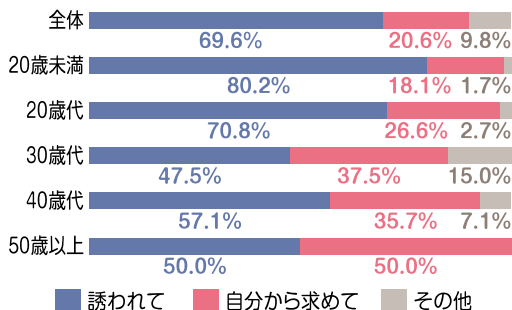
大麻及び覚醒剤に対する危険（有害）性の認識の比較



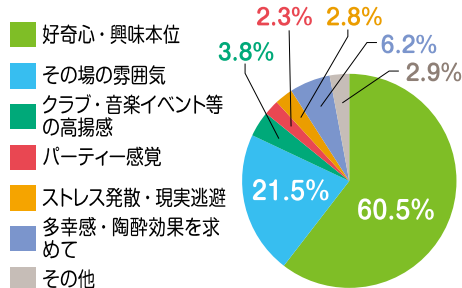
●大麻を初めて使用した経緯・動機

大麻を初めて使用した経緯は、「自分から求めて」よりも、「**誘われて**」が最多であり、また、「**好奇心・興味本位**」、「**その場の雰囲気**」が多くなっており、身近な環境に影響を受けて、享楽的に大麻を使用する傾向があります。

大麻を初めて使用した経緯（初回使用年齢層別）



大麻を初めて使用した動機（20歳未満）



●危険（有害）性を軽視する情報源

大麻に対する危険（有害）性を軽視する情報の入手先については、「**友人・知人**」、「**インターネット**」が全体の**80.6%**を占めました。

大麻に対する危険（有害）性を軽視する情報源

